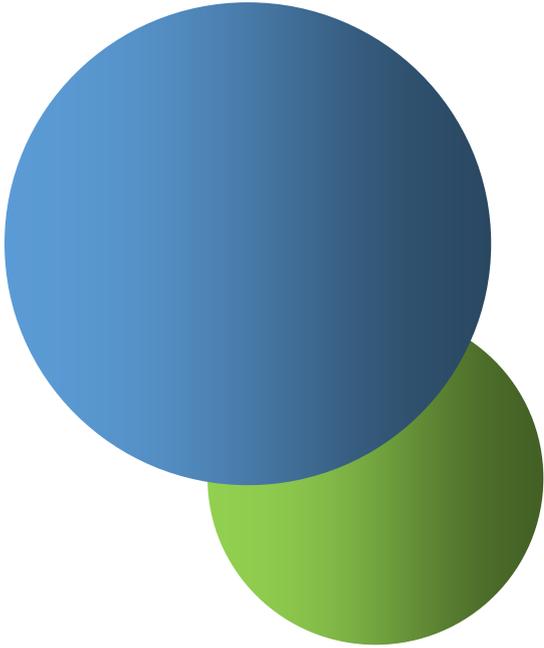


2022年1月



2022年度 大学入学共通テスト
分析資料

西北出版 株式会社

はじめに

センター試験から衣替えした大学入学共通テストも、2022年で2回目を迎えました。2017年の試行調査（プレテスト）以降、さまざまな形式の問題が出題されてきましたが、「大学入学共通テスト」の形も次第に定まってきたといえます。

学習指導要領で定められた内容が出題され、その多くは基本的な論点となっていますが、多くの受験生が苦戦しているようです。受験後に「時間が足りなかった」、「答えを見たらわかった」という声をこれまで以上に多く聞くのも、大学入学共通テストの特徴です。

ライバルに差をつけるためには、早い段階から最新の「出題の傾向」を知り、日々の勉強に反映させていくことが、一番の近道です。本冊子が、すべての受験生の羅針盤となることを願っています。

西北出版 編集部

目次

英語（リーディング）	p. 1
英語（リスニング）	p. 2
数学	p. 3
国語	p. 4
物理・物理基礎	p. 5
化学・化学基礎	p. 6
生物・生物基礎	p. 7
地学・地学基礎	p. 8
世界史B	p. 9
地理B	p. 10
日本史B	p. 11
現代社会	p. 12
倫理	p. 13
政経	p. 14
倫理，政治・経済	p. 15

英語（リーディング）

1. 2022年 大学入学共通テスト

昨年に引き続き、「日常的な題材」が多く見られた。料理、動物園、登山といった趣味やレジャーの文章や、図書館の案内、学校通信、授業の課題といった学校を舞台とする状況設定の文章が出題された。英文の媒体はメール、ウェブサイト、ブログ、掲示板、雑誌と多岐にわたった。ただし、昨年そのバリエーションの最も特徴的な1つと思われた第1問Aにおいて、今年、変更があった。2021年の第1日程・第2日程に連続して使われた「テキストメッセージを読みリクエストを読み取る」という定型が、今年は踏襲されなかった。

大学入試共通テスト 出題フレームと題材 ※ともに第1日程

大問		2021年	解答番号	配点	問題	2022年	解答番号	配点	
第1問	A	テキストメッセージ(忘れ物をした友人からのお願い)	1~2	4点	第1問	A	料理の本(ブラジルの果物)	1~2	4点
	B	ウェブサイト(ファンクラブの案内)	3~5	6点		B	動物園のウェブサイト(キリンの赤ちゃんの名前募集)	3~5	6点
第2問	A	審査結果(バンドコンテストの順位と総評)	6~10	10点	第2問	A	プリント(大学図書館の利用案内)	6~10	10点
	B	オンライン公開討論(新しい学校の方針)	11~15	10点		B	学校通信(ペットを飼うことのよさ)	11~15	10点
第3問	A	旅行サイトのレビュー(ホテルの口コミ、交通手段)	16~17	6点	第3問	A	ブログ記事(国際交流イベントで体験した日本文化の紹介)	16~17	6点
	B	学校通信(ボランティアの募集)	18~23	9点		B	雑誌(ある登山チームの活動記録)	18~23	9点
第4問		メールとタイムスケジュール(姉妹校との校外学習)	24~29	16点	第4問		2つのブログ記事(家電製品をどこで買うべきか)	24~29	16点
第5問		ニュース記事と発表用スライド(牛と馬を飼うある女性の話)	30~38	15点	第5問		伝記的文章と発表用メモ(テレビの発明者の話)	30~38	15点
第6問	A	論説と発表用ポスター(スポーツの安全について)	39~42	12点	第6問	A	エッセイ的文章と要約メモ(朝型と夜型について)	39~43	12点
	B	保健の教科書(甘味料について)	43~47	12点		B	説明的文章と発表用ポスター(リサイクルマークの種類について)	44~48	12点

事実 (fact) と opinion (意見) の区別問題が昨年より減少した。試行調査から出題されている設問タイプであり、やや形骸化しかけていると判断されての減少だろうか。単に区別するだけではなく、区別ができた上でその先を問う問題に変わりつつあると予想される。

総語数が昨年より約 500 語増えた。昨年の共通テストは、一昨年までのセンター試験に比べて約 1,000 語増えたが、今年さらに増加したことになる。

2. 受験生に問われる力

語数の増加により、所要時間内ですばやく英文を読む力がより強く求められることになったが、求められるのはスピードだけではない。従来、解き方として「本文より先に設問を読み、設問に関する情報を本文・図表から探す」、ときには設問に無関係と思われる箇所を読み飛ばすことさえ言外に推奨される節があった。しかし、昨年と今年の共通テストでは、「2箇所以上の情報を参照して、総合的に判断する」「細部を正確に読み取る」ことも求められ、設問に関する情報だけを狙って読むことは難しい問題もあった。たとえば第4問は、家電製品をどこで買うか、2人のブログ記事を読んで検討中という状況設定である。設問は、「2人が共通して主張していることは何か」「●●を買うなら、どの店で買うのが最も安いか」といったもので、答えを導くには、「10%の学生割引がある」「5年の保証をつける」などの条件を考慮しながら、文字通り「すみずみまで」記事を読む必要があった。昨年と比べると、出題フレーム（大問の構成・小問数・配点）に大きな変更はなかった。大問の状況設定や一部の設問（要約、次に起こることの予測、時系列への整列など）は、定番化されつつある。その一方で、「第1問はこういう問題」「この設問タイプはこう解く」などとパターン化されることを避けた意図も感じられる。情報の表現手法が多様化する中、さまざまな文脈で記述された情報を正確に読み取る力が生徒たちに求められているが、テクニックに頼りすぎることなく、総合力を養ってほしいという出題者の姿勢がうかがえる。

英語（リスニング）

2021 年 大学入学共通テストとの比較

文字数は、大問 6A が短くなり、大問 6B が長くなったりと変化はあるが、昨年の 1510 語から今年は 1558 語と微増、あるいは変動の範囲内と言える。平均点は 6 割ほどで、これも昨年より少し高いと言えるが、大きく難易度が変化したとは言えない。大問 5 は、今年はギグワークを取り上げており、digital platform など、きちんと理解しようとする大変な語が入っている。しかし問題を解くために、これらの用語が正しく分かることまでは求めているのは、昨年と同様である。ただ

27

 -

32

 の部分の正答率は多くが 20～30% とかなり低くなっている。

全体として昨年の方針が大きく変化した部分はないと言える。

数学

【概観】

昨年度の共通テストに引き続き、日常題材を数学で解決する問題や、会話形式の文章からヒントを得て解答する設問が随所に見られた。目新しい点として、複数分野の融合問題の出題や、昨年度とは異なる分野からの出題といった点が挙げられる。しかし、与えられた課題を数学的に解決するために、単純な場合についての問いからスタートし、徐々に複雑な場合の考察に昇華させていくという流れは昨年度を踏襲している。計算や解法といった技能の他に、テーマや題材を解法に落とし込むための理解力・思考力が試される出題であったといえる。

【数学Ⅰ・A】

昨年度と同様に日常生活を題材とした出題が見られた。第1問〔2〕では地図を題材に、三角比を用いた測量についての出題があった。この設問では、三角比の表を用いて角度を調べるという新たな試みもなされた。

また、今年度の共通テストにおいては分野融合の設問があったことが大きな特徴である。第1問〔3〕では2次関数を用いて辺の長さの最大値を求める設問があり、第2問〔1〕では2次不等式と集合の融合問題があった。

第3問・第4問では、昨年度と同様に、比較的単純な場合の設問から始まり、その手法を応用して複雑な場合について考察する問題だった。また、昨年度は具体的な数値の計算の後に一般化された抽象的な関係について問う出題が見られたが、今年度は具体的な計算においてより深く踏み込む傾向が見られた。

【数学Ⅱ・B】

日常題材からの出題や会話形式の誘導が増え、文章量が増加した。特に第3問の数列では、歩行者を追いかける自転車の動きが複雑で、リード文で丁寧に説明がなされた。旅人算の要素を含む設問もあり、漸化式の利用も含め対応力が試される問題であった。

数学Ⅰ・Aと同様に、分野融合の問題も出題された。第1問〔1〕においては、正接を用いて直線の傾きを考えており、正接の加法定理を利用する場面もあった。

また、前身のセンター試験時代も含め、近年あまり出題されなかった設問が見られたことも特徴的だった。第2問では二つの3次関数のグラフによって囲まれた図形の面積を積分で求める設問や、3次方程式を解く設問が見られた。第3問では連続型確率変数の出題があった。

国語

○第1問

- ・本文が【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】の複数提示となる。問6の枝問数減少により解答数は1つ減。
- ・漢字問題のうち、2問が漢字の意味を判別する設問となった。
- ・第1回第1日程では見られなかった、表現に関する設問が問5として出題された。
※ただし、第2日程では「構成と内容」についての設問が問5として出題されていた。
- ・新傾向の設問である問6は、「自分の考えを整理する」ための「メモ」の作成を前提としたものとなった。第1回第1日程での「内容をよく理解するため」の「3つのノート」作成にも通じるが、【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】両方に目を配る必要がある。

○第2問

- ・設問数は構成変更により1つ減。解答数は1つ減。
- ・問1が語彙問題ではなくなり、6選択肢から正解を2つ選ぶ読解問題となった。
- ・読解問題のうち1問(問4)が枝問2問構成となり、それぞれ本文中の表現(同一人物を表す表現の違い)に着目して心情や様子を読み取る設問となった。
- ・新傾向の設問である問5は、「枝問2問構成の最終設問」である点は第1回の第2問問6と変わらないが、本文中の語句に関する国語辞典の記述・歳時記所収の俳句および解釈を示し、それらを踏まえて考えをまとめるための「ノート」形式となった。第1回第1日程では第1問問6で見られた「3つのノート」作成に近い形式とも言える。

○第3問

- ・本文が【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】の複数提示となる。設問数は構成変更により1つ減。ただし解答数には変化なし。
- ・【文章Ⅱ】中の和歌について触れた選択肢は一部で見られたものの、第1回の問5のような「和歌そのものを中心として取り上げた、独立した設問」は設けられなかった。
- ・新傾向の設問について、第1回(問5)は別の文章を提示したうえでの比較・読解問題であったが、今回(問4)は【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】に関する会話中に3つの空欄を設けた、枝問3問構成の出題となった。共通テスト導入前の2018年度に行われた第2回試行調査(プレテスト)で漢文の最終問題(第5問問5)として出題された形式に類似しているが、選択肢数が各問とも5→4に減じている。

○第4問

- ・設問数は構成変更により1つ増。ただし解答数には変化なし。
- ・複数の本文(文章と漢詩)を踏まえて漢字1字を補う空欄補充問題が引き続き出題されたが、説明も含めて正しいものを選ばせる形式となった。音読み・訓読みの判別および漢詩に関する知識も要求されており、新傾向の設問としての色彩が濃くなった。
- ・問6が「本文で蝶が止まった場所の変遷について、順に正しく示した組合せを選ぶ」という、これまでの漢文ではあまり見られない形式の出題となった。

物理・物理基礎

■物理基礎

問題の構成

2021年度共通テスト第1日程に比べて大問数に変化はなく、設問数は3減少し、解答番号数は2減少した。

2022年度本試験：第1問（16点，設問数4，解答番号数4），第2問（16点，設問数4，解答番号数5），第3問（18点，設問数3，解答番号数8），各解答番号の配点4～5点

2021年度第1日程：第1問（16点，設問数4，解答番号数6），第2問（18点，設問数5，解答番号数6），第3問（16点，設問数5，解答番号数7），各解答番号の配点2～4点

2021年度第2日程：第1問（16点，設問数4，解答番号数4），第2問（19点，設問数5，解答番号数7），第3問（15点，設問数4，解答番号数4），各解答番号の配点2～4点

出題形式・内容

第1問の小問集合は、力学3問、波1問であり、力学の割合が高かった。第3問では、熱・力学・電気分野を扱う総合問題がユニークな対話文形式で出題された。波の中間は出題されなかった。昨年第1日程に引き続き、解答の数値を直接マークする問題が出題された。難易度は昨年第1日程に比べて難化した。

■物理

問題の構成

2021年度共通テスト第1日程に比べて大問数に変化はなく、設問数は1減少し、解答番号数は3減少した。

2022年度本試験：第1問（25点，設問数5，解答番号数6），第2問（30点，設問数6，解答番号数7），第3問（25点，設問数5，解答番号数8），第4問（20点，設問数4，解答番号数4），各解答番号の配点2～5点

2021年度第1日程：第1問（25点，設問数5，解答番号数5），第2問（25点，設問数6，解答番号数12），第3問（30点，設問数6，解答番号数7），第4問（20点，設問数4，解答番号数4），各解答番号の配点2～5点

2021年度第2日程：第1問（25点，設問数5，解答番号数7），第2問（25点，設問数5，解答番号数6），第3問（25点，設問数7，解答番号数9），第4問（25点，設問数5，解答番号数5），各解答番号の配点2～5点

出題形式・内容

大問のA、B分けはなく、第4問は原子分野からの出題であった。波の大問は出題されなかった。第2問は力学であったが、仮説の誤りを実験で検証するという見慣れない内容であった。文章選択問題が多かった。昨年第1・2日程に引き続き、解答の数値を直接マークする問題が出題された。難易度は昨年第1日程並みであった。

化学・化学基礎

■化学基礎

問題の構成

2021年度と2022年度との間で、構成に大きな違いはなかった。

2022年度本試験：第1問（30点，設問数10，解答番号数10），第2問（20点，設問数3，解答番号数5），各解答番号の配点3～4点

2021年度第1日程：第1問（30点，設問数8，解答番号数12），第2問（20点，設問数2，解答番号数5），各解答番号の配点2～4点

2021年度第2日程：第1問（30点，設問数9，解答番号数11），第2問（20点，設問数2，解答番号数7），各解答番号の配点2～4点

出題形式・内容

2021年度共通テストはセンター試験と極端に大きな違いは無かったが，2022年度も基本的には2021年度と同じ傾向であった。2021年度との出題分野の重複が避けられていた。実験結果の内容を読み取る考察問題が出題された。2021年度に比べて難易度はやや高くなったと考える。

■化学

問題の構成

2021年度と2022年度との間で、構成に大きな違いはなかった。

2022年度本試験：第1問（20点，設問数5，解答番号数6），第2問（20点，設問数4，解答番号数6），第3問（20点，設問数3，解答番号数5），第4問（20点，設問数4，解答番号数7），第5問（20点，設問数2，解答番号数9），各解答番号の配点2～4点

2021年度第1日程：第1問（20点，設問数4，解答番号数6），第2問（20点，設問数3，解答番号数5），第3問（20点，設問数3，解答番号数6），第4問（20点，設問数5，解答番号数6），第5問（20点，設問数3，解答番号数6），各解答番号の配点2～4点

2021年度第2日程：第1問（20点，設問数4，解答番号数5），第2問（20点，設問数3，解答番号数7），第3問（20点，設問数4，解答番号数5），第4問（20点，設問数5，解答番号数8），第5問（20点，設問数2，解答番号数7），各解答番号の配点1～4点

出題形式・内容

2021年度物理・生物科目で出題された，部分的に間違った組合せにも部分点を与える形式が採用された。2021年度との出題分野の重複が避けられていた。計算問題の割合は2021年度と同程度であったが，実験結果を読み取る考察問題は増加した。

生物・生物基礎

■生物基礎

問題の構成

2021年度と2022年度との間で、構成に大きな違いはなかった。

2022年度本試験：第1問（19点，中間A・B，設問数6，解答番号数6），第2問（16点，中間A・B，設問数5，解答番号数6），第3問（15点，中間A・B，設問数5，解答番号数5），各解答番号の配点2～4点

2021年度第1日程：第1問（18点，中間A・B，設問数6，解答番号数6），第2問（16点，中間A・B，設問数5，解答番号数5），第3問（16点，中間A・B，設問数5，解答番号数5），各解答番号の配点3～4点

2021年度第2日程：第1問（18点，中間A・B，設問数6，解答番号数6），第2問（16点，中間A・B，設問数5，解答番号数6），第3問（16点，中間A・B，設問数5，解答番号数6），各解答番号の配点2～4点

出題形式・内容

2021年度では、正しいものを過不足無く含む選択肢を選ばせる設問で、不足した選択肢を選んだ場合でも部分点を与える出題があったが、2022年度では出題されなかった。実験結果からの考察問題が増加し、選択肢が多い（6～10）設問が増加した。難易度が高くなったと考える。

■生物

問題の構成

2021年度と2022年度との間で、構成に大きな違いはなかった。

2022年度本試験：第1問（12点，設問数3，解答番号数3），第2問（22点，中間A・B，設問数7，解答番号数7），第3問（19点，設問数5，解答番号数5），第4問（12点，設問数3，解答番号数4），第5問（16点，設問数4，解答番号数5），第6問（19点，設問数5，解答番号数5），各解答番号の配点2～4点

2021年度第1日程：第1問（14点，設問数4，解答番号数4），第2問（15点，設問数4，解答番号数4），第3問（12点，設問数3，解答番号数3），第4問（13点，設問数3，解答番号数4），第5問（27点，中間A・B，設問数7，解答番号数7），第6問（19点，中間A・B，設問数5，解答番号数5），各解答番号の配点3～5点

2021年度第2日程：第1問（25点，中間A・B，設問数7，解答番号数7），第2問（22点，設問数6，解答番号数6），第3問（14点，設問数3，解答番号数4），第4問（15点，設問数4，解答番号数4），第5問（12点，設問数3，解答番号数3），第6問（12点，設問数3，解答番号数3），各解答番号の配点3～5点

出題形式・内容

2021年度はセンター試験に似た内容であったが、2022年度は考察問題の割合が増加した。2021年度と同様に、正しいものを過不足無く含む選択肢を選ばせる設問で、不足した選択肢を選んだ場合でも部分点を与える出題があった。選択肢が多い（6～10）設問が増加した。難易度はかなり高くなったと考える。

地学・地学基礎

■地学基礎

問題の構成

2021年度共通テスト第1日程に比べて大問数が1問増加し、設問数・解答番号数に変更はなかった。

2022年度本試験：第1問（20点，設問数6，解答番号数6），第2問（10点，設問数3，解答番号数3），第3問（10点，設問数3，解答番号数3），第4問（10点，設問数3，解答番号数3），各解答番号の配点3～4点

2021年度第1日程：第1問（24点，設問数7，解答番号数7），第2問（13点，設問数4，解答番号数4），第3問（13点，設問数4，解答番号数4），各解答番号の配点3～4点

2021年度第2日程：第1問（27点，設問数8，解答番号数8），第2問（13点，設問数4，解答番号数4），第3問（10点，設問数3，解答番号数3），各解答番号の配点3～4点

出題形式・内容

自然環境と災害という身近なテーマに関する大問が出題された。センター試験よりも思考力を要する問題が増えたという点では、今年の第1日程と同傾向であった。図やグラフを読み取る問題が多かった。難易度は今年の第1日程並みであった。

■地学

問題の構成

2021年度共通テスト第1日程に比べて大問数に変化はなく、設問数は1増加し、解答番号数も1増加した。

2022年度本試験：第1問（17点，設問数5，解答番号数5），第2問（20点，設問数6，解答番号数6），第3問（20点，設問数6，解答番号数6），第4問（20点，設問数6，解答番号数6），第5問（23点，設問数7，解答番号数7），各解答番号の配点3～4点

2021年度第1日程：第1問（18点，設問数5，解答番号数5），第2問（18点，設問数5，解答番号数5），第3問（21点，設問数6，解答番号数6），第4問（23点，設問数7，解答番号数7），第5問（20点，設問数6，解答番号数6），各解答番号の配点3～4点

2021年度第2日程：第1問（17点，設問数5，解答番号数5），第2問（17点，設問数5，解答番号数5），第3問（23点，設問数7，解答番号数7），第4問（20点，設問数6，解答番号数6），第5問（23点，設問数7，解答番号数7），各解答番号の配点3～4点

出題形式・内容

一つのテーマに沿って各分野の内容を問う総合問題（第1問）が、今年の第1・2日程に引き続き出題された。レポート形式の問題は出題されなかった。最近の話題（チバニアン）を扱った問題が出題された。今年の第1日程と比べて、計算問題は減少した。難易度は今年の第1日程に比べてやや易化した。

世界史B

1. 前年からの変更点

全体の問題構成は、大問数 5、設問数 34、解答数 34 で、前年と同じであった。

地域別にみると、西アジアや東南アジアからの出題が増えた。また、オセアニア史が、前年第 1 日程に出題なしで、本年は 3 題出題された。時代別にみると、近現代史からの出題が前近代史からの出題よりやや多い程度で、昨年よりはバランスが取れている。テーマ別にみると、政治史からの出題が多く、社会経済史の出題は 2 題ほど、文化史は 5 題ほど前年より少ない。問題形式でみると、地図問題が、前年の 1 題から 3 題に増えた。一方、資料（地図、絵画、写真、史料、グラフ・表）の数が、昨年の 17 から 13 に減少した。とくに例年出題されていたグラフの読み取りと年号整序がまったく出題されなかった。ただし、表中の数値を用いて考察させる問題があった。逆に、正文選択の問題が、昨年の 10 題から本年の 19 題と大幅に増えたが、誤文選択の問題はまったくなかった。研究や議論のための史料や根拠として適当なものを問う問題があった。設問別には、第 1 問で、問 9 は研究内容とそれに必要な資料についての問題であった。前年の第 1 日程第 1 問問 4 では、文書資料の説明を選択させた。第 3 問で、問 4・問 5 は表中の数値を用いた正誤選択問題と正文組合せ問題であった。

2. 受験生に問われる力

知識理解はもちろん、資料の読み取りの力が必要である。用語の暗記だけではなく、できごとの関連を考察する力が必要となる。たとえば、第 2 問の問 2 は資料から「アメリカ合衆国に奪われた」「スペインの最後の植民地」を地図から選択する設問であった。また、第 3 問の問 4・問 5 はともに東南アジア・インド・中国本土・ヨーロッパの面積と人口推移を示す表を読み取り、知識と組み合わせる設問、問 7 は会話文の要旨の正誤を問う設問、第 4 問の問 3 はファシズム体制と見なせる根拠と見なせない根拠を選択肢からそれぞれ選び組み合わせる問題、問 4 はドイツ騎士団の撃退を称える映画がソ連で上映禁止となった根拠として推察される仮説を選ぶ問題、第 5 問は文章や図から空欄に入る人名などを読み取る問題と、読み取った内容を前提として解く問題がほとんどであった。

地理B

1. 第2回大学入学共通テストについて

大問数は5で、2021年度から変更はなかった。解答数は2021年度(第1日程:全32個, 第2日程:全30個)から、31個になった。解答数は2021年度第1日程と比べてやや減少したが、ページ数・大問数は変更なく、全体的な問題量は昨年並であった。組合せ形式の問題は19題で、2021年度より1つ減ったが、全設問における比率は高い。組合せ形式の問題のうち2題は8択式であった。また、単語を選ばせる4択式問題は姿を消し、4択式の文章正誤判定はやや増加した。すべての設問において資料が出題され、地図・グラフ・写真など多様な資料が扱われた。また、第1回と同様、複数の素材を組み合わせる出題が多くみられた。図版(図・表・写真・資料※)の点数は39で、第1回よりさらに多くなっており、1つの設問あたり平均1.3点の資料が与えられていることになる。各大問の分野構成は2021年度と同様で、第1問は自然環境と自然災害、第2問は産業分野、第3問は村落・都市と人口、第4問は地誌、第5問は地域調査である。なお、第2問はSDGsを意識した資源利用と環境に関する出題となっている。また、第4問では昨年姿を消していた「比較地誌」が部分的に復活した。地理の全分野について満遍なく学習することが求められており、図表の分析などは、正確な知識があれば正解できる問題が多い。昨年度より取り組みやすい問題が多いが、比較的練られた良問が多かった。

※ 図表・写真や短文などを組み合わせた複合的な図版。

2. 受験生に問われる力

教科書や統計資料集、地図帳を用いた学習を通じて、基本的な知識を正確に身につけることが求められている。またその基本知識を、各種調査や地球的課題への取り組みなどの学習の場面で活用・応用する力が問われている。資料解釈力が重視され、基礎知識を前提としない初見の統計資料や図版資料においても正確に読み取る能力が求められる。普段の学習において、共通テストで問われる本質を見失わないように心がけることで、ボリューム感に圧倒されずに正解にたどりつくことができる。

日本史B

1. 前年からの変更点

第2回大学入学共通テストは、形式面では第1回共通テストと変更は無く、小問数がセンター本試験の36題から比べて、32題へと減少したほかは、従来のセンター本試験の形式を概ね踏襲したものとなっていた。具体的には、選択肢が4択もしくは時系列を問う6択に限られ、大学入学共通テストに先駆けて実施された平成29・30年度試行調査（プレテスト）で示されたような複数選択形式や9択形式、小問をまたぐ連関形式のような設問は見られなかった。内容面でも第1回共通テストと大きな変更は無く、資料（史料や図表）が従来のセンター本試験に比べ多く使用され、資料から読み取った情報と歴史的事象との関わりを類推する設問や、資料から歴史的事象を多面的・多角的に考察する設問などが出題された。具体的には、第2問問3〔解答番号9〕、第6問問6〔解答番号31〕は資料をもとに歴史事象を考察する力が問われており、第1問問5〔解答番号5〕、第6問問2〔解答番号27〕は教科書の知識をもとに歴史的事象との関わりを類推する力が問われていた。また、第4問問3、4〔解答番号19、20〕、第5問問2〔解答番号23〕、問4〔解答番号25〕のように史料から情報を読み取る問題も豊富に出題された。

2. 受験生に問われる力

第1回、第2回の大学入学共通テストから考えられる、受験生に今後求められる力としては、歴史的事象を多面的・多角的に考察する力と、示された資料と歴史的事象との関わりを考察する力である。これらを身につける対策としては、学習する中で、なぜそれが起きたのかなどの歴史事象同士の関係性を意識しながら学ぶことである。同時代の出来事や前後の出来事との因果関係などから、歴史を俯瞰して捉える視点を持ちたい。また、史料問題についても多数出題されているので、資料集などを用いて多くの史料を目にし、史料問題への苦手意識を無くしておくことも有効である。ただし、設問の切り口は異なっているとしても、全体ではあくまでも基礎的な学力が問われているため、一部の資料問題への細かな対策の前に、まずは基礎的な知識を堅実に身に着けることが重要である。

現代社会

1. 前年からの変更点

全体の問題構成は、大問数 5・設問数 30・解答数 30 で、前年と同じであった。問題文や資料の分量については、前年よりもやや増えた印象である。設問の形式については、「組合せとして最も適当なもの」という設問が前年第 1 日程では 14 題であったのに対し、本年は 16 題とさらに増え、過半数を占めた。配点については、第 3 問の経済分野が前年 27 点から本年 20 点と減少して比重が下がったのに対し、第 5 問の課題探求学習は前年 12 点から本年 19 点と増加して比重が増した。設問別には、第 2 問問 1 で前年の出題がなかった課題追求のための方法についての 4 択問題が出題された。また、時事的・社会的な出題が見られた。問 5 で 2021 年 4 月の民法改正による成年年齢の引き下げを意識した日本の法制度を問うような出題がなされた。第 4 問でも時事的な出題があった。問 1 の多様性に関する 4 択問題で、「女性管理職の比率」・「障害者が参加できるスポーツ」・「同性パートナーシップ制度」という選択肢があった。また、問 5 はデジタル著作権についての設問であった。第 5 問は、「課題探求学習」を題材にした読解中心の出題で、昨年よりも 2 題増えて 5 題となった。

2. 受験生に問われる力

基本的な出題が多いので、まずは教科書の内容をきちんと身につけることが必要である。次いで、文章や表、グラフなどを読み取る力が必要となる。たとえば、第 1 問の問 3 は比例代表選挙の当選者の決定方法に関する問題で、資料を分析しさらに計算する能力が必要である。また、第 2 問の問 2 は、職業選択などに関する基準とアイデンティティの状態の分類に事例を合致させる問題で、選択肢の文が長いので効率的に読み取らなければならない。第 3 問の問 2 は不良債権の分類に関して述べられた資料文を理解する力、問 6 は日本の性別・年齢階級別労働力の近年の動向に関する知識をもとに図表を読み取る力、第 4 問の問 4 は、資料中の空欄を埋める問題で、文章読解力が必要である。第 5 問にいたっては、複数あるいは長文の資料や選択文で構成されており、読解力がものをいう。さらに、時事的な問題が出題されるので、最新の情報には触れておいたほうがよい。

倫理

1. 前年からの変更点

・問題構成について

第1問（源流思想）、第2問（日本思想）、第3問（西洋思想）、第4問（青年期、現代の諸課題）という4つの大問で構成される点は前年と同様であった。小問数は32問から33問に増えたが、(1)・(2)のような枝問がなくなったため、解答番号は33と変わらない。しかし、3行におよぶ選択肢が大幅に増加するなど、全体の分量は増加している。

・各大問の構成について

昨年は会話文のほか、センター試験型の文章によるリード文も見られたが、今年はすべての大問が会話文を中心に組み立てられている。また、第1問 問8や第3問 問8で見られるように、登場人物である高校生が会話や資料を通じて主体的に学習し、考え方を変化させたり深化させたりする設定が特徴的であった。

2. 受験生に求められる力

資料や記述を分析して判断する力と、総合して理解する力の双方が求められている。選択肢の行数が長くなったため、スラッシュで区切って判断するなどの工夫が有効である。また、単に思想家とキーワードを結びつけて記憶するだけでなく、例えば「行為や情念に過剰や不足がある状態を避ける」（第1問 問4①）という記述から「中庸」というキーワードを導き出す必要がある。キーワードとその内容や具体例を往復させて理解を深めたい。単に暗記科目として学習するのではなく、自分の考え方を見つめ直し、変化させたり進化させたりするきっかけにするなどして、主体的に倫理の学習を進めることが求められている。共通テストの設定は、そのような主体的な学習のモデルになるだろう。

政経

1. 前年からの変更点

・問題構成について

4つの大問で構成されているのは前年と同様であった。小問数も30問と変わらないが、前年の第4問 問8のように2つの解答番号がある小問がなくなったため、解答番号は31から30に減少した。

・各大問の構成について

政治分野では、前年のように長い資料を読み解く問題は減る一方、センター試験で頻出した年代整序問題（第4問 問1）なども出題された。経済分野では、多くの図表が用いられ、読み解くのに時間を要したと思われる。国際分野については、例年よりも出題が少なかった。

2. 受験生に問われる力

正確な知識と、知識や資料を元に推論する思考力が求められている。判例の出題について見ると、前年は公式判例集を読み解く問題（第2問 問1・2）であったのに対し、本年は判例の事案と結論の知識が問われている（第1問 問3）。憲法の主要な条文のほか、最高裁が下した違憲判決などの重要事項は正確に記憶したい。ただし、今後、前年のような出題の可能性もあるので、双方の形式に対応できる力をつける必要がある。図表の問題については、知識や理解を元に必要な情報を絞り込む能力も試されている。例えば、第3問 問5は、「消費税の逆進性」について問うている。表にはア～キまでの7項目があり、一つ一つ検討していったらいくら時間があっても足りない。しかし、逆進性の意味（所得の低い者ほど税負担が高くなる）を理解していれば、カのみを検討すればいいことがわかる（キは逆進性を弱めるための軽減税率）。

倫理, 政治・経済

1. 前年からの変更点

前年と同様、大問7問で構成されていた。倫理分野は「倫理」の大問4問と、政経分野は「政治・経済」の大問4問のうち3問と共通の問題が出題された。小問数は倫理分野が15問から16問に増えたが、(1)・(2)のような枝問がなくなったため、解答番号は16と変わらない。政経分野は16問と変わらないが、前年の第7問問4のように2つの解答番号がある小問がなくなったため、解答番号は17から16に減少した。

2. 受験生に問われる力

倫理分野については「倫理」のすべての大問から出題されている。また、政経分野については政治と経済がほぼ同等の割合でバランスよく出題された（ただし、今年は国際政治についての出題はなかった）。出題範囲が広いため、丸暗記ではとても対応できない。理解や論理に裏打ちされた堅実な学習を全範囲にわたって行うことが求められる。過去問を利用して、どのような知識が求められているか、どのような思考力が試されているかを見極めて、苦手分野を作らないようにしたい。様々なテーマから出題されるので、頭を切り替えながら、テンポよく解き進むことが大切である（「倫理」と「政治・経済」も参照のこと）。